

## 雑誌記事における女相撲のイメージに関する一考察

— 「女闘美」観念に着目して —

一 階 千 絵

### 序 章

#### 第一節 問題の所在

日本におけるスポーツ文化の歴史に関する研究は、従来、明治以降の近代スポーツ史、特に学校教育との関連を重視する「体育史」を中心として展開されてきた。一方、日本の民族スポーツ<sup>1</sup>の一つである相撲の歴史についての研究は大相撲愛好家、いわゆる「好角家」の手により勸進相撲、大相撲を中心に記述・研究されてきた傾向がある。その中において女相撲（女性力士による相撲）は全く取り上げられないか、取り上げられたとしても猥褻見世物とみなされて詳細な検討が行われていない場合が多い。

本稿では、昭和以降に発行された各種雑誌記事において女相撲に付されたイメージの様相とその変遷をまとめた。特に従来研究のための資料とされなかった性風俗を扱った雑誌の記事を扱い、女性の格闘や相撲に見出す美意識をさす造語である「女闘美（女斗美）」と称する観念にまつわる事象に着目して女相撲を猥褻視する見方の流布の様相およびその影響を検討する。

#### 第二節 方法と主な資料

本稿は雑誌記事を中心とした文献研究によって、女相撲に付されたイメージの様相とその変遷を追うものである。

特に月刊雑誌『奇譚クラブ』（1947～1975、曙書房（のちに天星社、暁出版と社名を変更））を中心とした、第2次世界大戦後（1945～）に発行された性風俗を扱う雑誌の記事を用いることにより、従来当然のこととして疑問

視されることがなかった、女相撲を猥褻視する見方の様相を探る。また、『奇譚クラブ』において提唱されていた「女闘美」という観念に着目することにより、一時期提唱されていた女相撲に見出される美意識と猥褻性の関わりについて考察する。

性風俗に関する雑誌記事は公序良俗に反する内容や表現が多く、また必ずしも当時の実態を反映していないことから、スポーツ文化の歴史のみならず各種の学術研究にあまり用いられてこなかった。しかし女性の格闘や相撲に関する記事が性風俗に関する雑誌、特に『奇譚クラブ』に多くみられたことから、本稿ではこれらの雑誌記事を女相撲の実態に関する資料ではなくイメージに関する資料として用いることにした。

### 第三節 日本における女相撲の略史

日本において女性が相撲をとる事例は、『日本書紀』巻第十四・雄略天皇十三年九月（西暦469年頃）に初の記録がみられる。これは雄略天皇が、大言壮語した木工の失敗を誘うため采女（女官）を集め、裸にして禪を締めさせ相撲をとらせたというものである。『三国志』に類似のエピソードが存在する<sup>2</sup>ことや、雄略天皇の暴君性を示す数多いエピソードの一つであることなどからこの出来事を史実と認定することは難しい。しかしこの記録が「記紀」として権威づけられた書物に記載されたものであることから、女相撲は珍奇なもの、かつ男性の性的興味を引くことのみがねらいであるとする証左として後世の文献において取り上げられることになった。このことが女相撲を猥褻視する言説の形成に大きな影響を与えていることは無視できない。

その後女相撲に関する記録は途絶え、延享元年（1744）頃から興行としての女相撲が江戸で行われるようになったとする資料がみられる。女相撲興行は明治から昭和初期にかけても複数の興行団により行われたが、第2次世界大戦終戦後娯楽の多様化や興行スペースの減少などから下火になり、昭和30年代を最後にみられなくなった。

この他、雨乞いのために行われるもの（秋田県）、民俗芸能として行われるもの（東北地方、九州北西部）、観光イベントとして行われるもの（北海道）など様々な形態の女相撲が存在するが、近年では競技スポーツとして女子相撲が行われるようになっている。平成8年（1996）に国内の競技組織である「日本新相撲連盟」が発足して全国大会が実施されるようになり、平成

11年（1999）からは国際大会も実施されている。

#### 第四節 先行研究

日本における女相撲を総合的に扱った研究としては、金田英子「女相撲 もう一つの大相撲」<sup>3</sup>が挙げられ、また特に見世物・興行として行われてきたものに関する研究としては、金田英子「興行としての女相撲に関する研究」<sup>4</sup>と、亀井好恵<sup>5</sup>「女相撲への憧憬」、同「民俗文化における女の力について 女の大力・興行女相撲を中心に」<sup>6</sup>がある。金田の論文は江戸から明治・大正にかけての女相撲興行に関する記録をまとめたものであり、亀井の「民俗文化における女の力について 女の大力・興行女相撲を中心に」は東北地方を中心に、女相撲興行が興行先の地元の女性たちに魅力的なものとしてとらえられ、民俗芸能として行われるようになった様子を報告している。同じく亀井の「女相撲への憧憬」は怪力女性の伝説や興行女相撲をもとに、女性が力を発揮することが民間信仰としていかなる性質をもつものかを論じたものである。これらはいずれもここ数十年以内の研究であり、民族スポーツとしての女相撲の研究は、いまだ発展途上であると言える。

江戸時代の見世物女相撲に関する著作としては、平井蒼太<sup>7</sup>「見世物女角力のかんがへ」<sup>8</sup>、平井通『おんなすもう』（1972 有光書房）、および雄松比良彦『女相撲史論』<sup>9</sup>が挙げられる。

平井の著作は2作ともほぼ同一の内容であり、江戸時代以降の女相撲興行について髪型・服装の変遷を追っている。平井の女相撲史観は、女性同士の対戦形式をとるものと盲人男性との対戦形式をとるものを区別せずに扱い、さらに盲人男性との対戦形式をとるものが猥褻見世物とされたとする資料から、女相撲はもともと猥褻見世物であり技芸や力を競う性質のものは比較的遅い段階（江戸時代末期）になってからできたとするものである。

一方、雄松の著作は副題に「江戸時代女相撲史 その従来流布説の誤像の批判と実情再現の調査・研究」とあり、女相撲に関する諸文献をもとに、女相撲は「エログロ猥褻好色見世物」<sup>10</sup>であったという説を批判する内容となっている。雄松の女相撲史観は、「純・女相撲」（女性同士の対戦）と「盲・女相撲」（盲人男性との対戦）を区別し、純・女相撲は「まとも」で「正式」の相撲であったとするものである。雄松の著作は感情的な表現が目立つことや系統だった記述ではなく内容の重複が多いこと等の問題こそあるものの、

資料の分析そのものには甚だしい曲解はみられず、十分に妥当性のあるものと思われる。

これらの先行研究においては、女相撲およびその担い手の様子を明らかにする「実態史」の解明に主眼が置かれている。そこで本研究では観客やその他の人々により女相撲に与えられたイメージの内容の変遷、つまり「言説史」についての考察を行うものである。

## 第一章 明治～戦前の雑誌記事における女相撲に関する言説

### 第一節 「変態」、「エロ・グロ・ナンセンス」と女相撲

女相撲、特に興行として行われたものが雑誌にとりあげられたのは、明治23年（1890）12月10日発行の『風俗畫報』第二十三号の10ページから11ページにかけて、同年11月に東京両国回向院境内で行われた興行の様子が掲載されたものが初出と考えられる。これは讀賣新聞が同年11月8日から23日の16日間で、計11日において、のべ15本にわたり掲載した記事を抜粋しまとめたものであり、番付や力士の出自の転載などが見られるのみである。

その後、大正期には社会現象や芸能、職業など、珍しいものには何にでも「変態」の語を冠する風潮や、昭和初期には「エロ・グロ・ナンセンス」として表される色情的・猟奇的で無意味なことを追う社会風潮がみられるようになる。この時期においては、江戸時代の風俗が「変態風俗」として語られる傾向があるが、その傾向について政治史学者の菅野聡美は、明治政府により人為的に撲滅・強制された筈の風俗を紹介することが世俗の多様性の認識につながり、その多様性を面白がるのが変態志向およびそのブームを支えた読者の感性であったと分析している<sup>1)</sup>。女相撲興行、なかでも特に江戸時代のものもその例外ではなく、男性の相撲とは全く違う珍奇猥雑なものとして扱う様相がみられる。

たとえば『グロテスク』昭和5年（1930）1月号（グロテスク社）において、「現代香具師生活の内 女相撲」と題した記事中に、江戸時代の女相撲興行に関する以下の記述がみられる。（以下、本稿の記事引用文中の下線はすべて筆者による）

當時は大名たちの中にも随分かうした變態的裸體美觀賞にうつゝを抜してゐた不心得者が多かつた様である。こんな世の中で女相撲が人氣を呼んだのは無理も

ないことである。ましてや××××××から、ひいては所謂取口拝見の観客の要求に依ては××××××まで見せたと言ふに到つては である。(p.139)

そして、同時代の女相撲興行および女力士に関しては、以下のように記述している。

相撲は普通の相撲と大差なく、(中略) 大體に於て八百長は行れない。だから何れも真劔に相撲つてゐる。それだけに亦第三者からは一寸悲惨な感じがする。(p.144)

多くは生れながらの高町小屋の女である様だ。(中略) 彼女達の腹に出來た子供達も結局大概は母の業を受嗣ぐに到る様である。(讀者よ、女相撲だつて子供は出來ますよ) (p.145)

男に對しての彼女達は比較的恬淡たるものがある。是は彼女達が寧ろ男性に近いからだ——と言つて了へば理窟はないが、十三四の少女時代から多くの男性の前に肌を晒して來て聊かもさうした方面に就て男性に對する羞恥の念のなくなつてゐる事實稽古時に仲間の若い男達と常に稽古をつけあつてゐると言ふ事實、等々を思合すれば、其れが自然であるかも知れない。それに『男を知ると相撲に弱くなる』と昔から言はれ、亦親方や先輩から注意されてゐる事を念頭に置いて所謂『男を屁とも思はぬ』觀念を持つに到つてゐる事も一つの主要な原因であらう。(p.146)

これらを総合すると、江戸時代に行われた女相撲については「變態的裸體美觀賞」と結びつけて猥褻的なイメージを強調している。一方、筆者の見聞として述べられている同時代のものは、「真劔にだけ一寸悲惨な感じがする」としていることから、真劔に相撲を取ることは女性の行うこととしてそぐわないという感覚をもって語っていることが伺える。また、女力士に関しても、出産能力という女性特有の身体的側面に言及する一方、男性に對する羞恥心の欠如、「男を知ると相撲に弱くなる」という教えを引き合いに出し男性を寄せ付けない/寄せ付けてはならないものとしている。つまり、女性は男性と結びつくものとするヘテロセクシュアルな關係を前提とする社会の中であつて、女力士は女性としての身体を持ちながら男性を寄せ付けないという、性的原則から遊離した存在として語っているのである。

他にも江戸時代の見世物女相撲は所詮八百長であり観客の興味は力士の美醜にしかなかったとする「江戸座談会」(『江戸文化』第2巻第10号(昭和3年(1928)11月号)所収)における廣田星橋の發言など、この時期には既に女相撲を猥褻なもののみならず言説の存在が指摘できる。

このような風潮の中、「女角力考」（『奇書』第2巻2号（昭和4年（1929））所収）において田中香涯は江戸時代の見世物女相撲を女性同士のものと盲人男性と組んだものとを明確に分けて資料を紹介し、記事の結びでは

女子體育の必要が高唱され、女性間に運動競技の奨励せらるゝ今日でも獨り相撲だけは風紀上行ふことの出来ない處に女性の弱味があり女子のスポーツに缺陷がある。（p.41）

としている。相撲を女子のスポーツと結びつけて考えており、この時期の著作物における言説としてはむしろ特異な立場にあるものといえよう。

## 第二節 平井蒼太「見世物女角力のかんがへ」の影響

このように戦前の雑誌においては、女相撲、特に江戸時代における興行としての女相撲が「エロ・グロ」、「変態」といった観念と結び付けられてきた状況があった。その結びつきを決定的にし、後の相撲文化研究に大きな影響を与えたものが、昭和11年（1936）に『歴史公論』（雄山閣）第5巻第5号誌上で発表された平井蒼太「見世物女角力のかんがへ」（pp.100-114）である。この「見世物女角力のかんがへ」は、昭和8年（1933）に『見世物女角力志』（私家版）として刊行したものを下敷きにしており、その内容は大きく二つに分けられる。

まず前半では、興行としての女相撲、平井の用語を借りるならば「見世物女角力」の登場した背景についての考察を行っている。平井は女相撲の発生に対し

好色の慾望を構成してゐる處の、裸女美鑑賞慾の心理的發展<sup>12</sup>

見世物興行界の飽く處を知らない挑情的卑猥味への、極めていいざい・ごういんぐな主潮<sup>13</sup>

それらのものの背景を為してゐる當代世相の癡類<sup>14</sup>

の三方面から考察するとして、『日本書紀』の雄略天皇の采女相撲をはじめ、元禄以降の種々の書物から女性の裸体を鑑賞する男性の描写の例を挙げて、「たゞ男性好色の對象としての、婦女の崇高な美への憧憬」<sup>15</sup>、「唯々好色觸手のある段階をなすもの」<sup>16</sup>と断じている。その上で、個人的な性的娛樂のために行われたとするフィクションの女相撲が描かれている井原西鶴『好色一代男』等の記述をもって、延享以前に上方において「見世物女角力」が行われていたという見方を提示している。

後半は、江戸時代から明治以降のものも含めた「見世物女角力」について、女力士の髪型および着衣の変遷を追っている。その前提として当時の女相撲を「殆んど皆（中略）女力士と盲人力士との合併角力である。」<sup>17</sup>、「たゞ露出的魅力に依據した裸女であり、挑情的意圖による演技を以て、一時を糊塗するに過ぎない處の、力士ならざる女力士である」<sup>18</sup>とし、女相撲と盲・女相撲とを同一の文化として語る立場に立っている。また、その上でもともと裸体に脚布（下着）一枚の姿で行っていたものが、徐々に相撲用の締め込み姿に変化してきたとしている。明治以降についても、女力士が半股引に肉襦袢を着用していると明記してある讀賣新聞の記事<sup>19</sup>を確認しなかったらしく、江戸時代同様に裸体にまわし姿であったとし、また山東京伝の黄表紙『玉磨青砥錢』、つまりフィクションの作品をもとに女力士の出自を「下賤な賣色者」に近いものと断定するなど、終始「見世物女角力」の猥褻性を強調している。

この「見世物女角力のかんがへ」は、昭和47年（1972）に加筆され『おんなすもう』と題して有光書房より刊行された。この「見世物女角力のかんがへ」、および『見世物女角力志』と『おんなすもう』は、後の相撲、および女相撲に関する著作物にたびたび引用・参考とされ、「女相撲は裸体を見せる／見ることがその唯一の目的である」という言説の再生産に大きな影響を及ぼしている<sup>20</sup>。

## 第二章 戦後の性風俗雑誌記事における女相撲に関する言説

### 第一節 月刊雑誌『奇譚クラブ』における「女闘美」

女相撲が猥褻視される背景として、女性のまわし（ふんどし）姿や格闘する姿に「美」を見出せるとする人々による記事が、戦後に発行された性風俗を扱った雑誌に取り上げられたことも指摘できる。中でも、雑誌『奇譚クラブ』は女相撲に関する記事を十数年の長期にわたり多数掲載していた。

『奇譚クラブ』は昭和22年（1947）から昭和50年（1975）まで発行された、サディズム、マゾヒズム、および各種のフェティシズムに関する読み物を中心とした月刊雑誌である。この雑誌において昭和27年（1952）頃より女相撲に関する記事が確認でき、特に昭和36年（1961）から同46年（1971）にかけてはほぼ毎号女相撲に関する記事やイラスト（図1、図2）が掲載されてい

る。昭和27～38年（1952～1963）頃までは、歴史研究記事、女相撲興行の観戦記、興行に関するエッセイが多くみられたが、昭和39～46年（1964～1971）頃にかけては小説を中心として記事数が大きく伸び、各寄稿家の理想とする一種のファンタジーとして女相撲が描かれるようになった。これは、昭和30年代までみられた女相撲興行を実見した寄稿家と、そのような経験のない寄稿家との世代交代がその原因の一つとして考えられる。その後昭和47年（1972）以降廃刊に到るまでは小説も途絶え、雄松比良彦による歴史・文献研究と少数のエッセイだけとなっている。

また、見世物・興行としての女相撲だけでなく民俗的な行事としてのものや性的な娯楽としてのもの、またフィクションの作品の中では競技スポーツとしてのもの<sup>21</sup>など、そこで取り上げられた相撲の形式は多岐に渡る。女性

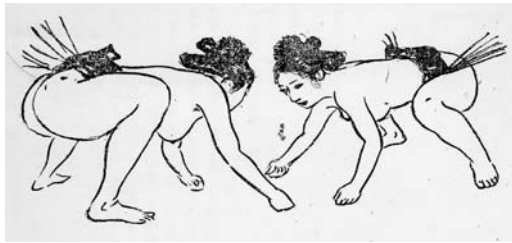


図1 鬘を結った女力士のイラスト  
(昭和35年(1960)9月号 p.74 雪崎京人・画)



図2 断髪の女力士のイラスト  
(昭和30年(1955)3月号 畔亭数久・画)



の格闘、特に相撲にみる「美」を「女闘美（めとみ）」と称する概念として、そのあるべき姿を論じたり小説の題材にしたりするという、女相撲に関する論壇とも言えるものが寄稿家により形成されていたのである。

「女闘美」とは、同誌の寄稿家・土俵四股平<sup>22</sup>による造語である。土俵は大正中期に「メトミ」なる新語が誕生したとしている<sup>23</sup>が、この語の広まったのが『奇譚クラブ』においてであることから、本研究では「女闘美」の概念をもとに女相撲に関する言説の諸相を明らかにする材料として同誌の記事を用いる。

## 第二節 提唱者・土俵四股平の女闘美観

土俵四股平は、「女斗美遍路」（昭和32年（1957）7月号）において、「女闘美」の概念を以下のように述べている。

女斗美は、どこまでも「美」の世界である。（中略）女斗美は、若い健康な斗志に燃える美女の対応の美であり、組みぬかんとする全裸の曲線美である。（pp. 150 151）

土俵は、女相撲が「女闘美」と称する美をもたらす原動力として「斗志」（闘志）という語に代表される精神性を重視している。しかしここでの「斗志」とは、単なる闘争心や勝利を得ようとする心の動きではなく、一人の男性からの愛を競うことから来るものであるとしている。

たとえば、土俵と弟子の一人との対話という形をとっている「女闘美相伝」（昭和33年（1958）8月号）では、土俵は弟子の言葉を借りて以下のように女闘美の観念を表現している。

女斗美は、お金や名誉で取組む相撲ではありませんわね。世に一人しかない敬愛する方のために、そして自分が敬愛するその方からこよなく愛される自分であることを知ったとき、喜びと誇りと愛情に燃えて、二人の花園を犯す同性に対して、命をかけて挑みかかるその勇猛心、愛に目覚めたひたむきな勇猛心が、乳房を鋒として、美しく輝くと思います。（p.67）

女斗美の美しさは、愛人のために死斗する女の全姿から発するコロナのようなもの（p.68）

つまり、女性がとる相撲には男性との恋愛関係の存在が前提となっている点が、土俵の女闘美観の大きな特徴である。そして土俵自身、もしくは自身をモデルとした登場人物がつくった私設の相撲部屋で相撲にいそむ女力士

たちを描いた、フィクションともノンフィクションともつかない記事群においては、登場する唯一の男性である師匠がその恋愛の対象となっており、男性が一段高い地位にいて女力士に対し支配力を及ぼす絶対的な存在として想定されている。男性に支配される立場としての女力士像を描くことにより、女相撲、「女闘美」は男性なしには存在しえず、そのくびきから逃れられないとする観念が伺えるのである。

### 第三節 その他の寄稿者の女闘美観

土俵の女闘美観における恋愛感情の絶対視は、後の寄稿家の女闘美観にはみられない。むしろ女性の闘争心に美を見出す一方で、男性の存在を関わる者（当事者）としてではなく見る者（第三者）として想定する傾向がみられるようになる。男性が女相撲に関わる場合には、自ら女性に相撲の手ほどきをする（海野美津男の小説など）、あるいは夫婦間の娯楽として相撲をとる（椿寿郎の小説）といった描写がみられる。女性と同等のレベル、もしくは「指導者」であっても「支配者」ではない、つまり絶対的優位にまでは至らない関係の上で相撲に関わることを想定した言説が展開される傾向がある。

たとえば海野の小説では、後期のものの多くに、2人の女性が相撲を取っている場面に出くわした知人の男性がコーチを買って出るというパターンで男性の介在がみられる。男性が女性達に関わる態度・心情は、はじめのうちは全く性的な要素を含まない、またはそのような感情は一時的なものであり容易に抑えられるかのように表現される。そして結末は女性二人のうち一方が就職・結婚などの理由で相撲をやめる前後に、男性が残る一方の女性に対する恋愛感情を自覚し交際を開始するというパターン<sup>24</sup>が多い。これは、女力士がある特定の男性の寵を競う、つまり、男性が一段高い地位にあり女力士に対し支配力を及ぼす絶対的な存在として想定されている土俵の女闘美観と大きく異なる様相を呈していると言える。

また、精神面よりもむしろ身体や着衣といった外見に関する面に「美」を見出す者が多くなっている。特に、明治以降の女相撲興行に代表される着衣の上からまわしを締める形式よりも江戸時代の女相撲興行に代表される裸体にまわしを締める姿での相撲を賛美する傾向がみられる。また、「相撲」という形態をとれば何でもよいというわけではなく、八百長や相撲の真似事ではなく真剣勝負や力闘を期待する者が圧倒的に多い。

裸体に褌を締め肉弾相打つ時、その真剣な表情、瞬間に変化する体の線と形、さては輝く皮膚の色彩、更に女性間でしか見られぬ激しい闘争美、あやしくも美しいのが女相撲ではないかと思う。

(昭和35年(1960)12月号 雪崎京人「美術文学に現われた女闘美」p.114)

天下の女相撲愛好者は柔肌に喰い込んで締めた褌一本の女体の相撲姿に憧れているものをシャツと猿股とは情ない。(中略)水も侵垂れる角力鬘に薄化粧して紫紺の褌をキリリと締め込んだ勇み姿には身も心も恍惚とってしまうものを惜しい事だ。

(昭和38年(1963)9月号 津谷正春「女相撲の思い出話」p.101)

そして各寄稿家によりどのような身体部位や事象に女相撲における「美」や魅力を見出すかに多少の違いはあるものの、それらはエロティシズムと無縁ではなく、むしろ密接な関連を持つものとして語る姿勢は共通している。雄松比良彦は、昭和47年(1972)9月号「女相撲書誌雑考(上)」にて、はしがきとして、女相撲に関する文献の渉獵の意義を以下のように述べている。

女相撲。その魅力が、われわれをとらえて離さない。けれども、過去に現実にあったそれは、グロテスクで醜悪な見世物であったものが多いために、そういう醜悪さに興味を引かれていられると思われやすく、理想化された美しい女相撲のすばらしさは、空想の産物になってしまう。(中略)とにかく、この特異なもの、さまざまのすがたを知る事は、理想化されたイメージを育てる上にも必須の事であろう。(p.150)

この記述に象徴されるように、女相撲を扱った記事群は「理想化された美しい女相撲」、「理想化されたイメージ」、つまり各寄稿家の持つ「女闘美」観念を誌上において実現するべく執筆されていたと言えよう。

#### 第四節 その他の性風俗雑誌における「女闘美」

その他の雑誌では、戦後数年間に出版自由化を機に発行された大衆向け娯楽雑誌、いわゆる「カストリ雑誌」にも女相撲を取り上げた記事が存在した。多くは性的な娯楽として私的に行われる相撲についてのものであるが、中には興行として行われていたもののルポも存在する。

「カストリ雑誌」以降の性風俗を扱った雑誌にも、女相撲を取り上げた記事がみられる。しかし『奇譚クラブ』のように女相撲を長期的、集中的に取り上げたものはみられず、サディズム、マゾヒズムを扱う雑誌に散発的にみられるにとどまる。また、歴史検証記事や一種の美意識である「女闘美」観

念を意識した記事はほとんどなく、女相撲とサディズム、マゾヒズムとのつながりを前面に出した記事や読み物が多い。

また、昭和50年代以降になると「女闘美」の語についての理解にも変化がみられる。

女斗見ということばがある。(中略) 女斗見とは文字通り『女同士が争う様子を眺めて楽しむ』というものである。

(下川耿史「私説 女相撲異界のエロチズム」：『別冊 S M ファン』昭和59年(1984) 6月号司書房 p.296)

女相撲のことをメトミとも呼ぶが、この語源がわからない。眼が富むことかなのかと思われるが、...

(佐山玲「女相撲へのある憧憬」：『MISTRESS「女王館通信」』Vol.16 平成6年(1994) 司書房 p.139)

このように「女闘美(女斗美)」の「美」を「見」と表記するケースや、カタカナ表記のみが伝わったため語源が不明瞭とされるケースがみられる。その結果、女性の格闘に見出す美意識のことを指す「女闘美」から、女性の格闘一般、およびそれを見て楽しむという娯楽をさす「メトミ」へと、語の持つ意味合いが変化してきたことが伺える。いわば女相撲は「女闘『美』」と称される、一種の美意識、魅力をもつ相撲ではなく、性行為の一種もしくは添え物としての存在へと変わっていったのである。

### 第三章 戦後の一般雑誌記事における女相撲に関する言説

#### 第一節 女相撲の猥褻視

一般的な雑誌においても、女相撲にはあくまでも競技性はなくもっぱら観客の大多数を占める男性の性的興味を満足させるための性的なショーの一形態として位置付けられている。例えば、東京都新宿区のピアガーデンでの女相撲ショーを取り上げた記事では、取組の様子を以下のように描写している。

ごらんのスナップ(筆者注：図3)も、別に双方上手投げ下手投げ、白熱の応酬を展開しているわけではなく、要するにカブリツキの客向けの大サービスなのです。(中略) この勝負、最後は横綱の上手投げが見事に決るのだが、そこで客から選ばれた審判員が物言いをつける。結局、どちらが勝っても、1回のショータイムで必ず2番、大股開きの取組を観戦できるという仕掛け。(『FOCUS』平成元年(1989)5月19日号 p.69)



図3 東京・新宿のピアガーデンでの女相撲ショー  
(『FOCUS』平成元年(1989)5月19日号 p.69)

ここでは、女相撲にはあくまでも競技性はなく、もっぱら観客の大多数を占める男性の性的興味を満足させるための性的なショーの一形態として扱い、性的興味の充足を第一義とする記事作りがなされている。

また、興行として行われていた女相撲を「失われた文化」として取り上げ、取組や力技を見せるプロフェッショナルの職業人としての女力士像を描いた記事も見られるが、とりわけ江戸時代のものを猥褻・醜悪なものとする言説は根強く残っている

女相撲と聞くと、かつてピアガーデンやキャバレーの余興として殿方の眼を楽しませていたトプレス・ショーを思い浮かべる方もおられよう。江戸時代には、裸に禪一本の女力士が男の盲人と土俵に上がる好色・滑稽趣向の強い見世物もあったことが記録に残っている(以下略)。

(『アサヒグラフ』平成12年(2000)6月23日号)

悪趣味でグロテスクな見世物だったにちがいない。女は乳房をまる出しに、梅毒にかかった者が大半だった。怖いモノみたさのオドロの世界。ノコッタ、ではなくクワバラ、(『週刊新潮』平成7年(1995)6月15日号 p.160)

## 第二節 新相撲に関する言説

平成7年(1995)7月4日、日本相撲連盟はアマチュア相撲競技の普及の一環として、年内に女性の競技組織「日本新相撲連盟」の設立、および同年9月2日の日本相撲連盟創立50周年記念式典において、デモンストレーショ

ンを行うことを発表し、平成8年(1996)4月には「日本新相撲連盟」が発足した。その後、1999年より国際大会が実施されるようになり、選手はレオタードやレスリングのシングレット(試合着)の上にもわしを締め、土の土俵で取り組みを行っている(図4)。

新相撲を取り上げた記事においても、女相撲の猥褻的イメージを引きずった記述や、新相撲は「本物」「本来」の相撲ではないという意識がみられる記述がある。また、参加者による談話や周囲の反応という形でマイナスイメージを意識した言説も同様にみられる。

むろん、周囲は反対の嵐。『両親も反対でしたし、クラスの男の科たちにも「まわし締めるなんて恥ずかしくねえのかよ」とか言われました。』

(『FLASH』平成11年(1999)10月12日号 p.36)

マスコミからすれば『新相撲』は男子大会の裏開催、極端な言い方をすればソエモノという感覚なのだろう。

たしかに日本人の目には、レオタードやスパッツの上にもわしを締め込んだ女力士の姿は滑稽に映るかもしれない。あるいはKONISHIKIみたいな巨漢女性がドタドタ取組する競技のどこがいいの?という意見もある。」

(『Number』平成17年(2005)11月17日号 p.115)

また、インタビュアーの選手に対する質問には、選手のアスリートとしての面だけでなく、恋愛、芸能、ファッションといった女性が興味を持つとされる話題や、以下の記事の中にもあるように「女心」、「乙女心」といった言



図4 第1回世界新相撲選手権での取組(無差別級)  
(『週刊新潮』平成11年(1999)12月13日号 pp.158-159)

葉を用いてことさらに若い女性としての姿を強調する傾向もみられる。

好きなタイプは『よく聞かれますけど……う～ん』とまた頬がポツ。シャイな“大横綱”なのだ。(『週刊女性』平成9年(1997)2月25日号 p.12)

が、稽古はつらい。筋肉は痛み、足の裏の皮が剥けた。乙女心の恥じらいもあった。(『FLASH』平成11年(1999)10月12日号 p.36)

『今の体重は?』という質問に『答えなきゃいけませんか?』と下を向いてはにかんだ。(中略) 女力士の素顔は恥らう乙女だった。

(『PHPスペシャル』平成14年(2002)10月号 p.67)

スポーツ社会学者の飯田貴子によると、スポーツ競技、とりわけ男性的な種目とされるものに卓越した女性競技者に対し、メディアはことさらに私生活でのセクシュアリティを暴きだし、異性愛を受け入れる女性として描くことによりジェンダーの差異化を図るという<sup>25</sup>。新相撲でも同じく、選手の私生活、中でも「好みのタイプは」という質問に代表される男性との関係に注目することにより、男性の相撲選手とのジェンダーの差異化を図る言説の存在を指摘できる。

一方、外国人選手に対しては、日本人選手に対してはみられない、アスリートとして世界大会において好成績を収めることに対する高い評価が与えられている。

すでにドイツやロシアはフンドシを締めて激しい稽古を積み重ねてきたというのに、日本チームは今大会で初めてフンドシを締めて対戦したというから遅れている。お家芸のハズが、すっかり、外国勢の体力、パワーに圧倒されてしまい、お寒い限りだった。

(『週刊新潮』平成11年(1999)12月13日 p.159)

大相撲を知らない外国人女性選手は、相撲に対する『羞恥心』がない。もちろん、まわりの人たちの(中略) セクハラめいた問いかけや視線もない。(中略) 日本の子選手たちは、競技そのものと同時に、周囲の意識とも闘っていると語るかもしれない。

(『大相撲』平成13年(2001)9月号 p.57)

各国の女子選手たちは、新しい格闘技として新相撲の稽古に取り組んでいる。(中略) 新相撲の競技としての楽しさに目覚めているのは、案外日本以外の選手たちなのかもしれない。

(『スポルティーバ』平成17年(2005)1月号 p.144)

これらの記事においては外国人選手の強さの要因として筋力、スピードなどの身体能力のみならず、まわしに対する抵抗の少なさをも提示している。

これは他の競技において日本人に対する欧米人の優越性を説明する際、主として身体組成や筋力の違いなどの身体面に根拠を求める言説<sup>26</sup>との大きな違いであり、新相撲に関する言説の大きな特徴と言える。

このように、日本の新相撲選手は外国の選手とは異なったまなざしにさらされ、語られているといった言説の様相が見て取れる。「相撲 = 『日本の』『男性が』行うスポーツ」という観念からするならば、外国の新相撲選手に対しては、「外国人の」、「女性が」行うという、二重のイメージの食い違いが生じていることになる。それにもかかわらず、日本の選手が外国の新相撲選手に比べてより奇異なイメージが持たれるのは、女相撲が明治以降連綿として猥褻視・蔑視されてきたこと、そして競技スポーツである新相撲を語る際にそのような興行としてのものが引き合いに出されることが大きな要因であると考えられる。

以上、日本の新相撲選手に対しては猥褻視されている興行女相撲との連想から新相撲を純粋な競技スポーツとみないにも関わらず、世界大会という国際的な舞台においては「国技」である相撲の担い手として好成績を上げることが期待するという方向性の食い違った言説の併存を指摘できるのである。一方、外国の選手に対しては「(彼女たちにとっての) ニュースポーツ」の挑戦者として比較的好意的に受け止め、語るという言説の様相がみられるのである。

## 終 章

大正から昭和初期にかけて江戸時代の風俗が「変態」、「エロ・グロ・ナンセンス」との関連で語られる風潮の中、雑誌メディアにおいて女相撲を猥褻視する言説が出現した。

戦後になると、性風俗を扱った雑誌において女相撲が取り上げられるようになり、特に『奇譚クラブ』においては数多くの記事がみられた。寄稿家により多少の差異はみられたが、総じて「女闘美」、つまり女相撲、および女性の格闘に見出す「美」という概念の形成を通じての女相撲の理想像を描くものであった。『奇譚クラブ』以後も性風俗を扱った雑誌において、女相撲が性的な要素、特にサディズム・マゾヒズムとの関連をもって語られる傾向は続き、一般の雑誌においても女相撲が性的娯楽のためのショーとして行われ



る様子が報じられた。そこではむしろ競技性を否定し性的なショーとして純化されていくことにより、女相撲は性的なもの、猥褻なものとする言説の再生産がみられている。また、女性の格闘に見出す美意識のことを指す「女闘美」から、女性の格闘一般、およびそれを見て楽しむという娯楽をさす「メトミ」へと、語の持つ意味合いが変化し、女力士を力と技能を持った存在としてではなく性的興味の対象に過ぎないものとしてとらえ、女相撲を性的な欲求や特殊な性的嗜好と結びつけたものとしてラベリングし、負のイメージの強いものとして語ることに繋がっていったと考えられる。

20世紀末には「新相撲」と称し競技スポーツとして女性が相撲を行うようになったが、マイナスイメージを強調する言説は根強くみられる。また、選手のセクシュアリティに注目することにより、男性選手とジェンダーの差異化を図る言説の存在を指摘できる。国際大会が行われるようになって以降、日本人選手に対しては女性の相撲を奇異なものとして扱ひマイナスイメージをもって語る姿勢から脱却し切れていないにも関わらず、「国技」である相撲の担い手として国際大会で好成績を挙げることを期待する方向性の食い違った言説の併存を指摘できる。一方、外国人選手に対してはまわしを締めることを恥ずかしがらないことを賞賛しニューススポーツへの挑戦者として好意に扱う言説がみられる。

このように、日本の女相撲に関する言説においては、興行としてのものを中心とした猥褻視に基づく否定的な言説の度重なる再生産がみられる。

今後は、現存している新相撲、民俗芸能としての女相撲、観光イベントとして行われる女相撲について、猥褻視を中心とした言説が実態にどのような影響を与えているかを検討することが必要であろう。特に新相撲については女性のスポーツ参加および女性スポーツ選手に対するジェンダー・バイアスの問題としてだけでなく、民族スポーツと国際・競技スポーツの関係の問題としても考えることができる。相撲および新相撲の国際化はスポーツ人類学の分野における主要な研究テーマの一つである「民族スポーツの国際化」の例であることから、民族スポーツが国際化する際に発祥国・地域・民族のもつ当該スポーツに関するイメージや言説がいかなる変化、影響をみせるかという問題に関する注目すべき事例であると言えよう。

注

- 1 「国際スポーツ」(近代に欧米諸国で形成され、後に国際化したスポーツ)の対極にあるスポーツ類型であり、特定の社会、民族、地域に行われるスポーツをさす。(寒川恒夫編 2004 『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店 p.3)
- 2 陳壽撰・裴松之注 1959 (1973) 『三国志』第五冊 北京・中華書局、「呉書妃嬪伝」の注に、酒や女色を好み粗暴で驕慢であったとされている呉の最後の皇帝・孫皓が宮中の女官たちに金で作った髪飾りをつけたまま相撲をとらせ、髪飾りが壊れると次々と作らせたため国庫が底をついた、という旨の記述がみられる。
- 3 寒川恒夫編著 1993 『相撲の宇宙論 呪力をはなつ力士たち』平凡社 pp.109 140
- 4 『日本体育大学紀要』22 巻2号 (1993) pp.97 102
- 5 東北芸術工科大学東北文化研究センター 『別冊東北学』vol.7 (2004) 作品社 pp.295 311
- 6 歴史学会編 『史潮』(2001) 弘文堂 pp.44 61
- 7 平井蒼太と次の平井通は同一人物であり、前者はペンネーム、後者は本名である。
- 8 『歴史公論』第五巻第五号 (1936) 雄山閣 p.100 114
- 9 第一版：1975 京都謫仙居 (限定版)、第二版：1993a 『女相撲史研究』京都謫仙居 (限定版) に 『女相撲書誌考』(1993b)、 『女相撲ノート』各第二版とともに所収。
- 10 雄松 1993a p.9|ほか
- 11 政治史学者の菅野聡美は 『<変態>の時代』(2005 講談社現代新書)において、明治末に「正常ではない状態、異常」を示す語として心理学、精神医学の分野で用いられ始め、大正期に流行をみせた「変態」という語が、後に「変態性欲」としての面に注目が集まり意味が特化し変質していく過程を追っている。具体的な例は菅野 2005 pp.56 60を参照のこと
- 12 平井蒼太「見世物女角力のかんがへ」：『歴史公論』(雄山閣)第5巻第5号 1936 p.101
- 13 同上
- 14 同上
- 15 同上 p.103
- 16 同上 p.104
- 17 同上 p.107
- 18 同上
- 19 「花櫓娘角力」：『讀賣新聞』明治23年(1890)11月14日付記事
- 20 横山健堂『日本相撲史』(1943 富山房)など。さらにこの『日本相撲史』を引用した川端要壽『物語日本相撲史』(1993 筑摩書房)などの著作物も存在する。
- 21 ただし、現在行われている新相撲とは別の形態を取るものである。
- 22 『滑稽新聞』、『奇譚クラブ』ほか数種の雑誌に寄稿していた人物で、本名等は不明。「加茂三千彦」、「粟津實」等の筆名でも執筆活動を行っていたと見られる。(雄松 1993b p.341)

雑誌記事における女相撲のイメージに関する一考察

- 23 千種堅 「『女闘美』わが秘かな愉しみ」：『新潮45』昭和63（1988）6月号 p.221
- 24 昭和40年（1965）10月号「娘相撲物語 良男の体験」、昭和41年（1966）10月号「娘相撲物語 孝二の結婚」など
- 25 飯田貴子 2004「スポーツのジェンダー構造を読む」：飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店 p.18
- 26 日本人（アジア人） - 欧米人間だけでなく、欧米人の中でも黒色人種 - 非黒色人種のスポーツ能力に関する言説に同様の身体面重視の傾向がみられる。（ジョン・エンタイン著 星野裕一 訳 2003『黒人アスリートはなぜ強いのか？』創元社）

なお、本研究は拙稿「日本における女相撲に関する言説とその変遷」（2006年度早稲田大学大学院人間科学研究科博士（人間科学）学位論文）より雑誌メディアに言及した箇所を加筆修正・再構成したものである。